ヨコハマ人・まち 第12号

―まちの人がまちをつくる―

この情報誌は，パートナーシップのまちづくりを進めるため，趣旨に賛同して集まった市民と横浜市都市計画局企画調査課でつくっています。

地域の問題は自分たちで解決しよう！

下町気質　～中部地域のまちづくり

中部地域ともいえる，鶴見，神奈川，西，中，南の５区には，横浜市の中心市街地として，大きな商業ゾーンや企業，官庁が集中している地区があります。また，開港に伴って発展した地域でもあり，ひそかに“自分たちが住んでいるところこそがヨコハマ”と思っている人が多いようです。

下町情緒にあふれ，路地の草花栽培など，なごやかな風情を醸し出している地区も多く，これらの地域では，地域の問題は自分たちで解決しよう，行政とも協力しながら進めていこうという風潮が見られます。

また，地域の伝統も受け継がれています。田祭りの鶴見神社，神奈川区の洲崎大神，西区の伊勢山皇大神宮，お馬流しの本牧神社，市内最大規模の祭りといわれる南区の日枝神社（お三の宮），西の市の大鷲神社があり，他に浅間神社，杉山神社に住吉神社と，神社だけでも数え上げれば切りがありません。こうした祭りがまちの活気の源ともなっています。

このような下町の活気は，地域外の人に対する開放的な風土も培ってきました。横浜開港祭や花火大会をはじめ，大岡川の桜まつり，鶴見川にかかる様々な催し，本牧ジャズ祭など，大きなイベントも盛んで，周辺からも人を呼びこんでいます。

一方，中心地ゆえの課題もあります。高齢化率が高いこと。特に西，中，南区は高齢化率が市内トップ３で，17％を超えています。住宅密集地もあり，狭あい道路が多いことなど，福祉や防災面での心配は尽きません。また，みなとみらい２１地区など新しい商業ゾーンが開発され，新たな賑わいを生み出している一方，歴史ある商店街に対しても活性化が望まれています。

こうした課題に対して，昔から人と人のつながりと，おおらかに，地域の問題に自分たちで取り組んでいく前向きな市民気質を生かして，中部地域のまちづくり活動は展開されています。（三代）

特集1

地域を町内会が支える

～本牧元町南部町内会

本牧元町南部町内会館に私たちが行ってまずびっくりしたのは，会館の目の前にある大きなタブの木でした。元・町内会長で給食サービス「はまなす」の会の黒柳さんは，「古木は見つめる」と話されていましたが，「町内会館前の公道に，はみ出して立っているタブの木を処分して」という苦情があった時，町内会で話し合って残すことにしたとのこと。確かに通行の邪魔なので，町内会館の敷地をセットバックして門扉の位置を変え.道路を拡げ，古木は残したわけです。黒柳さんは，まちのムーブメントだと言われていました。このようなお話からもこの町内会の様子がうかがえて，まずは感心をした私たちでした。

まちをみつめる大きなタブの古木

黒柳さんが町内会長になられたのは今から１３年前とのこと。当時町内会館を建替えたり，規約を変えたりしたそうです。その後副会長もやり，現在は理事をやっているとのこと。そのような町内会との関わりの中でボランティア会「はまなす」を始められたそうです。

町内会におばあちゃんたちが増えてきたので，町内会館で月 2 回，おしゃべり会を始めたのが，「はまなす」のはじまり。雑巾さしなどを皆で午前中やっていると，すぐにお昼になってしまいます。お茶ぐらい入れてお菓子でも，そのうち 1 時か 2 時ごろまで居たい人も出てきて，お世話している人たちが炊き込み御飯でも食べましょう，おつけものもおつゆもという話になってきたわけです。それで月 2 回，軽い食事会をやるようになっていました。ちょうど会館の建替え時期と重なったので，厨房を充実させ，横浜市社会福祉協議会のあいあい基金から助成金をもらい，平成 5 年に町内会館で本格的に週1回の給食サービスをはじめることとなったそうです。

給食サービスをしている新しい町内会館

ボランティアのメンバーは地域の様々な立場の人たちを横つなぎにしたいと口コミで一本釣りしました。地域には，消費生活推進委員や民生委員等たくさんいて，あの人があんなことやこんなことやっているという情報で声をかけていったとのこと。

ボランティアは３８名いて，研修会を毎月やっています。汐見台福祉コミュニティー（本誌第 11 号で紹介）や東戸塚地区センターの給食活動等を見学に行ったり，市社協の方に来ていただいて学習会をしたりしているそうです。現在は４班に分かれて１週ずつ分担して活動しています。

給食サービスだけではなく，第１週は保健婦さんが来られて健康のチェック，第２週と３週は手芸や手仕事，第４週はイベント的なこと，小学生とのふれあいや防犯の話，奇術や落語等。利用者の方からは１食 300 円いただいています。申し込み制です。

最近「はまなす」のボランティアが町内会の役員になるなど，町内会と「はまなす」は一体で活動しています。

小学生とのふれあいの食事会

黒柳さんのお話が終ったあと，給食を作られている町内会館の厨房も見せていただきました。建替えの時に皆の意見を入れて作ったとのことですので，これが町内会館の設備かしらと思うほど立派なものでした。また，給食サービスの写真記録もきちんとファイルされていたのにも感激しました。（吉田）

湯っくり，湯ったりデイ銭湯

平成９年７月２日，南区浴場組合の協力のもと，“デイ銭湯”１号店「草津湯」がオープンしました。デイ銭湯は，南区在住の概ね 65 歳以上で体の弱い高齢者を対象に，

週1回，営業前の午前11時から午後2時まで開いています。

ボランティアによる血圧測定後，男女の間仕切りを開けた広い脱衣所で，カラオケやおしゃべり，持参したお弁当を食べるふれあいタイム。自然と仲間ができています。軽い体操をした後，間仕切りを戻して，いよいよお楽しみの入浴タイムです。手すりの付いたお風呂は安全に入浴できます。入浴後は，くつろぎタイム。みなさんゆっくり休んでから帰宅します。

脱衣場の間仕切りをあけて，ふれあいタイム！

利用者の方からは，「一人暮らしなので，この集まりが楽しみ」，「昼間からお風呂に入れるのがうれしい」，「他に施設はあるが，遠くて行けない」，「毎回，皆で食べられるようおかずを作ってくるが，喜んでもらえてうれしい」，「一日中話をしないことが多いので，ここに来るのが楽しみ」，「友だちができて，お互いの家を訪ねたりするようになった」など好評です。

「今後の銭湯は福祉との連携が重要。温浴は病気の予防にもなる。登録者は約 80 名，平均 30 人弱の利用があり，喜んでいただいている。今後も続けていきたいし，他の区にも広がることを願っています。」と「草津湯」のご主人の福田さんは話しています。なお，平成 10 年 6 月には，2号店「松美湯」もオープンしました。

デイ銭湯は，体の弱い高齢者の方にとって，身近なまちの施設を活かした健康とふれあいの場として，ますます必要とされるのではないでしょうか。（福田）

特集2

潮田地区のまちづくり

～地域ケアプラザから見る下町のコミュニティづくり

■潮田地区ってどんなところ？

鶴見区・潮田地区は臨海部の工場地帯に近い，という立地から戦前より住宅地として発展してきた下町的で気さくさを感じさせるまちです。戦後の急激な都市化の波を受け，人口密度の高い木造密集住宅地となり，震災，火災などの災害に対する心配や日照・通風など住環境面での課題も抱えています。最近では職住近接のまちとしての性格を保ちながらも，都心への通勤に便利な住宅地としての需要もあり，古くからの住民と，マンションなどに入居した新住民がともに暮らすまちーという側面も強まっています。

潮田のまちなみ

下町の雰囲気に象徴されるまちの魅力と先に述べた住環境上の問題点とは表裏の関係にあり，地域コミュニティを維持しながらいかに「住みよい，安心して暮らせるまち」を目指していくか，が課題といえます。

■潮田地域ケアプラザと潮田地区

平成6年に鶴見区で初のケアプラザとしてオープンした潮田地域ケアプラザは，現在まで地域生活福祉の拠点として，潮田地区の地域性を色濃く反映した活動を続けています。潮田地区での高齢者(65歳以上)の人口比率は平成11年3月時点で鶴見区（13.6%），横浜市（13.0%）をそれぞれ上回る16.2%。この地区における生活福祉サービスの需要の高さを表す数字です。これは，潮田地区に住み続ける住民の多さ（お互いがお互いを支え合う「隣近所」のおつきあい「下町風情」が残っていることが主な理由に挙げられる）を証明しており，ケアプラザの活動もこの地域性を生かした形になっています。

普通，地域ケアプラザでは，デイサービスと福祉保健相談が行われていますが，潮田地域ケアプラザでは，そこを拠点に地域活動・交流も活発に行われているところが特徴的です。ケアプラザを拠点として活動するボランティアサークル「鶴の恩返し」は，まさに生活密着型福祉の担い手として住民のニーズに応える活動を展開しています。

「最初はケアプラザのボランティア講座がきっかけで始まった「鶴の恩返し」ですが，今ではすっかり地域に溶け込んだと感じています。他のケアプラザにも出かけて，施設に根付いて地域で活動するボランティアを育てられないか？と考えています」（「鶴の恩返し」ボランティア・重岡昭男さん）

車いすをつかう人をケアプラザに送迎するボランティア

潮田地域ケアプラザは，このような福祉ボランティアとの連携のもとに，より地域に根ざしたサービスの一つとして地域ミニデイサービスを行っています。「民生委員が自宅の居間を提供するこのミニデイサービス「おりづるの家」は家庭的な雰囲気が大変好評です。それと民間のマンションの一室を借りてサテライト型のデイサービスを行っています。こういうサービスができるのも，潮田の地域性やボランティアの力によるものが大きいと感じています」（潮田地域ケアプラザ・多比羅さん）

■潮田地区のまちづくり

臨海部の工場で働く人の減少などで，既存の商店街はかつてのにぎわいを失いました。細い道路は放置自転車，違法駐車が多く，緊急時の車両の通行など地域住民にとって大きな問題になっています。また，木造住宅密集地であるがゆえに災害時の心配もあります。こういった「まちづくりの課題」を，地域生活福祉の観点を含め，バリアフリー化を進めるとともに，地域の助け合い，支え合いをさらに進めることで解決していこう，という取り組みが潮田地区のまちづくりの特徴であり，潮田地域ケアプラザの多比羅さん，福祉ボランティアの重岡さんらも地域に輪を広げながら，積極的に潮田地区のまちづくりの課題と，その解決方法を探っています。

たとえば商店街の配達サービスの相談に重岡さんたち福祉ボランティアが乗ることなどをきっかけとして既存商店街の活性化を図る試みや，高齢者の住宅問題，特に高齢者にとって建物の維持・管理・修繕等の大きな負担を，地域の支え合いなどによって緩和していけないか？などの取り組み（ボランティアの派遣・紹介など）が挙げられます。

また，潮田地区のまちづくりを検討する「潮田・本町通まちづくり協議会」では，「まちの点検会」を実施し，暮らしの目から見たまちづくりの課題をまとめ，下町的情緒を多分に残す細い路地などを「生活路地空間」ととらえて緑化や路上障害物の抑制，ブロック塀の制限を要望するなど，昔からある人と人の強い結びつきを生かしたまちづくりの構想としてまとめ上げられているようです。こうした成果が今後，鶴見区における都市マスタープランへも着実に地域の声を反映し，地域の特性を生かしたまちづくりの実現に向かって歩いていくのではないでしょうか。

これからの社会を，どう暮らしやすくしていくか？地域の人たちがさまざまな知恵を出し合いながらひとつずつ課題を解決しようとしています。潮田地区のまちづくりも，課題への取り組みがこれからどう進んでいくか，目が離せないと感じた取材でした。（金成）

鶴見区都市マスタープランについて

鶴見区では，より多くの人が満足できるまちづくりを進めるための羅針盤として，都市マスタープランを策定します。

プランの構成は，「区の将来像」と「地域別プラン」，「テーマ別プラン」，「まちづくりの進め方」からなります。身近なまちづくりに関する情報と既存の計画をわかりやすく整理し，地域の上手な利用方法を考えながら，地域の将来像を描いていきます。そして策定したプランに基づくまちづくりを円滑に進めるために，区民・企業・行政の役割分担を考え，推進体制や仕組みを検討します。

また，施設などハード面に限らず，ソフト面で対応できることも盛り込んでいきます。実現方法は１つに絞るとは限りませんし，まちづくりの方向性をまとめきれないものは選択肢として表し，将来の検討課題として掲げていくことにより，持続的なまちづくりの指針とします。

プラン策定の進め方ですが，「地域別プラン」は，区内を地形や世帯数バランスから，６つの地域に分けて，地域別の懇談会を順次開催しながら検討します。各懇談会は，自治会の地区連合からの推薦と一般公募により，計 40 名程度の参加者により，地域内の地区センターなどで開催します。並行して「テーマ別プラン」等についても，検討会を行う予定です。

また，作業を一緒に行うコンサルタントとして，都市プランナーなどの専門家集団である「横浜プランナーズネットワーク」と契約し，加盟するコンサルタントが各地域を分担します。これにより，今まで区の内外で行われてきた都市マスタープラン等の策定方法，成果，課題等を考慮したプランづくりを行います。また，策定作業を一過性のものではなく，将来にわたるまちづくりへとつながるようにしていきたいと考えています。こうして，区民と専門家と行政が一緒に知恵を出し合いながら，都市マスタープランを検討していく予定です。

（鶴見区区政推進課）

特集3

関内駅周辺地区のまちづくり

～中心市街地の活性化～

安政６年(1859)の開港以来，横浜は，海外からの文化の窓口として，また，商業をはじめ官公庁などが多く集まり発展してきました。なかでも，関内駅周辺地区は，港にも近く，数多く残る歴史的資産を活かした街づくりなど，横浜の顔として，独自の文化を育んできたと言えます。特に，地区内には，伊勢佐木町，馬車道，中華街，元町など，全国的にも有名な商店街があります。それぞれの商店街は，来街者が歩きやすい歩行者モールの整備や，街づくりのルールによる街並みの統一，また中華街のように独特な雰囲気を醸し出すなど，様々な工夫をして横浜らしい街づくりを進めてきました。

しかしながら，昨今，商業を取り巻く環境が大きく変化してきています。モータリゼーション化が進み，郊外部に大型ショッピングセンターの建設が進んだことなどから，関内駅周辺地区では，商業の売り上げや来街者の数などが伸び悩んでいます。また，隣接する，みなとみらい２１地区では開発が進み，多くの観光客を集めていますが，関内駅周辺地区へ回遊する人は少ないようです。そして，経済の長引く不況の影響を受け，業務ビルなども空きビルが増え，この地区の空洞化も懸念されています。

全国的にも，このような中心市街地の活性化が大きな課題となっており，横浜でも関内地区の活性化のための議論が盛んになってきました。特に，1998 年 11 月に開催された，都市づくりの国際会議（第２回ヨコハマ都市デザインフォーラム）では，関内地区の活性化が１つのセッションのテーマとなり，国内外の専門家に地元の人も加わり熱心な議論がされました。そこでの議論を展開する形で，地元の人を中心に「関内デザインシップ」という組織が立ち上がり，継続的な議論が進むとともに，行政との間でも委員会という場を通して盛んな議論がなされました。

その議論の結果は，中心市街地活性化基本計画という形で，まとめられつつあります。関内地区の活性化のためには，みなとまちの歴史や文化の蓄積を生かしながら新しい文化を生み出していくことが必要です。（関内駅周辺地区は，「ＯＬＤ＆ＮＥＷ」の街づくりがテーマになっています。）そのためには，商店街をはじめとする地元の方と行政が，パートナーシップを組んで，街づくりを進めていかなければなりません。たとえば，みなとみらい２１線などの基盤施設は行政が中心になり，活性化のための様々なソフト事業は，地元が中心になり，しかも，お互いに連携しながら進めていくことが重要となっています。

これらの動きの中で，今，地元を中心に，まちづくり会社設立の動きが出ています。街の情報発信や，空き店舗を活用した商業施設の立地など，関内らしい新しい文化を生み出していく事業が展開されることが期待されています。

（都市計画局企画調査課　秋元　康幸）

解説

中心市街地活性化とは？

中心市街地は，古くから商業，業務など様々な都市の中心的な機能が集まり，人々の生活や娯楽や交流の場となり，また，長い歴史の中で独自の文化や伝統を育むなど，その街の活力や個性を代表する「顔」とも言うべき場所のことです。

しかし，近年，多くの都市で，モータリゼーションの進展への対応の遅れ，商業を取り巻く環境の変化，中心部の人口の減少と高齢化などを背景に，中心市街地の衰退・空洞化という問題が深刻化しています。

このままでは，多くの街からその街の「顔」と呼べるような場所が消えていってしまいます。そのため，中心市街地の環境を整備し，人が集まりやすくなる仕掛けを作ることにより，中心市街地の再生を図ることが強く求められています。中心市街地の活性化は，市町村や地域の人が中心になって行う必要がありますが，国でも平成 10 年 7 月に「中心市街地活性化法（略称）」を施行し，活性化に取り組む市町村などを支援しています。

（都市計画局企画調査課）

特集4

都心に流れる川
～大岡川と大岡川桜まつり

■大岡川って，どんな川？

まずこの川のプロフィールから紹介していきましょう。
全長約 15km，流域面積は 27k ㎡，源流から河口まで横浜市域にあり，源流部の緑豊かな円海山丘陵地から新興住宅地，商店街を流れ，途中分流した川は，堀割川，中村川，堀川となり，港を支えた運河の名残を留めています。そして繁華街を通り，日本丸メモリアルパークと汽車道の脇で横浜港に注ぐ河口部は，みなとみらい２１地区などのウォーターフロントとして新しい都市整備が進められています。

満開の桜とEボート・大岡川ディスカバー号　末吉橋付近

横浜の「中部地域」の一部が，この下流域にあたります。この地域では，流域で活動する市民による流域連携が始まっています。その具体例のひとつとして中区内で行われている，大岡川桜まつりを紹介いたします。

■大岡川桜まつり（毎年４月上旬に開催）

地域的な花のまちづくり運動が発端となり，大岡川と花と緑の資源活用によって，自分たちの地域環境の改善と一層の交流，親睦を目的として，平成 5 年，町内会，商店会等に呼びかけを行い，大岡川桜まつり実行委員会が結成されました。

当初は手づくりでスタートし，回を重ねる度に充実してきたこのまつりは，川岸と川面を活用した地域情報の発信として，流域で活動中の市民団体やいろいろな人たちの協力を得て，Eボート・大岡川ディスカバー号の運行「大岡川体感・地域交流」，流域の 6 つの小学校対象「大岡川学校親子課外教室」，「カヌーと川で遊ぶ教室」，横浜ボートシアターによる船上音楽演奏「夜桜ぷかぷかコンサート」など，川面を活用した横浜らしさと，参加各町の独自の取り組みを併せた新しい文化創造活動と言われるまでになっています。大岡川桜まつりは，市民活動の連携によるボランティアで企画・運営・実行を行っています。

できれば現在，中区側と南区側とで別プログラムとして行われているまつりを流域という視点で連携できれば，より一層，地域，流域の活発な活動につながる可能性もあり，桜まつりのロゴマーク大岡川236～231の意味していることが理解できると思います。

(大岡川 Fun Club　鈴木　佳昭)

よこはま市民運営施設フォーラム
「汗と笑いの市民運営施設フォーラム」開かれる

3月 19 日（日）夜，市民運営施設の現状を考えるフォーラム「汗と笑いの市民運営施設奮戦談義」が開かれ，百人を越える関係者がかながわ県民センターに集まりました。

フォーラムの様子

コミュニティ施設の整備は，今や快適な市民生活を送るための必須条件になっています。市民の要望もかつては施設数の増加を求める声が大多数でしたが，市民にとって使いやすい施設への要望へと最近は変化し，やがてごくわずかではありますが，市民自らが運営や管理にもかかわる例が見られるようになりました。

とりわけ，平成８年度から各区役所で始まった市民と

行政の「パートナーシップ推進モデル事業」（本誌第 11 号参照）では，市民に施設運営を任せる区の事業が目立ちました。町内会・自治会など地域コミュニティの代表，環境保全やまちづくり活動などの担い手，さらには一般市民も参加した３年にわたる事業を通して，市民と行政の，また市民同士の協力関係が形成されていきました。

しかし施設運営の経験がなかった市民にとって，まさに「汗と笑い」と涙の試行錯誤の連続でありました。横浜中部地域でも，平成 11 年に山手２３４番館，エコライフかながわといった市民運営施設がオープンし，工夫や知恵を折に触れ情報交換していましたが，それがヒントになって今回のフォーラムへと結びついたのです。施設運営に参加している人，これから携わる人，関心のある人が一堂に会し，現在の課題を整理し，ノウハウを共有し，今後の活動に役立てたいと考え，実行委員会を立ち上げました。幸い都市計画局企画調査課の支援も受けることができました。

当日の進行は，まず先輩の長屋門公園歴史体験ゾーン（瀬谷区），舞岡公園田園体験区域（戸塚区），天王森泉公園「古民家」（泉区）など緑政局関連施設，次に教育委員会も関連している都筑民家園（都筑区）の例を聞き，続いてパートナーシップ推進モデル事業がきっかけになった山手２３４番館（中区，都市計画局主管），エコライフかながわ（神奈川区，環境事業局主管），今井地区センター（保土ケ谷区，市民局主管）が，自分たちの事例を発表しました。

公的施設ではどうしてもどこも同じようなイベントや事業が多くならざるを得ないのに対し，それぞれの施設から紹介された試みは，さすがに市民の手作りならではの感嘆される例ばかりでした。また，館内使用について禁止項目の少ないことをモットーとしている施設もあり，管理が優先する公的施設を見慣れている目からは大変に新鮮でありました。

後半の話し合いでは，民間施設や他都市からの参加者も議論に参加しました。一口に運営と言っても範囲や形態には差異が見られましたが，行政ではできにくい柔らかな施設運営の事例が次々と紹介されました。その結果，各施設とも市外からの見学客も増えてきていると言います。また多くの施設は多数のボランティアによって支えられており，ボランティアが有償か無償かについても議論されました。そうした事業を支える予算は最大の関心事でフロアからの質問が集中しました。

フォーラムでは活発な談義が交わされました

長い活動がベースになっているところでは体系的に後継者の養成も行っています。また，今後は市民運営の評価が必要では，という意見も出ました。問題点を絞りこんだところで終了時間となってしまいましたが，今後も実行委員会では，（財）ハウジングアンドコミュニティ財団の支援も得て，調査研究を続けていくので，ご意見などお寄せいただきたいと思います。

なお，当日の資料として各施設の概要を記した「大福帳（1,000 円）」を作成。各施設の資料コーナーも設けました。現在，フォーラムの記録（1,500 円）も作成中です。資料の問い合わせは，
アリスセンター（川崎，TEL　045-212-5835）まで。

（よこはま市民運営施設フォーラム実行委員会代表
嶋田　昌子）

（カット：よこはま市民運営施設フォーラムのチラシより転載）

イベント報告

西区ボランティア・フェスタ（3月18日開催）

西区内で活動しているさまざまなボランティアグループが，それぞれの活動を紹介するとともに，地域との交流の輪を広げたいと企画しました。主催は「西区サポーターズサークル」で，パートナーシップ推進モデル事業から誕生したもの。会場は西区地域活動ホーム。福祉・環境・まちづくり・音楽・パソコン・国際協力など10グループが参加して，活動紹介の展示，点訳の実演，パソコンの操作，合唱，合奏，フリーマーケットなど日ごろの成果を披露しました。（三代）

あけてびっくり平潟湾まるかじり会議（3月20日）

金沢区の横浜市立大学カメリアホールに，貴重な自然が豊富に残る平潟湾周辺の総合的なまちづくりを考えようと，小学生から中・高・大学生，金沢区民，市民活動団体，研究者等約160名が集まりました。

岸由二慶応大学教授の学生時代から関わってきた平潟湾についての基調講演，横濱金澤地域総合研究集団から平潟湾の生態系と文化，海と商業との関わりに関する調査，市民活動団体・児童生徒のアサリやハゼ，野鳥などの調査報告があり，平潟湾の魅力が次々と紹介されました。干潟の研究者からは，「平潟湾はこんなに地域で注目されて幸せ。水辺の衰退は全国的な傾向で，その活性化は大きな事例になる。」という発言もあり，実際の生活の場から生きた知恵を学ぶ「フィールドミュージアム構想」が提案されました。今後は，その構想を実現していくために，①月1回の平潟湾をテーマにしたイベントやフィールドワークを行う「平潟湾デー」の開催，②地域住民から平潟湾学芸員をつくる，③平潟湾から情報発信するために本やホームページをつくることが，村橋横浜市立大学教授から「平潟湾まるかじり宣言」として提言されました。

4月8日には，早速，第1回目の「平潟湾デー」としてフィールドワークが開催されます。（福田）

「舞岡公園 田園・小谷戸の里管理運営委員会」が誕生！

今まで，多くの市民に親しまれた「舞岡公園を育む会」（本誌第10号掲載）は，平成11年4月環境庁長官表彰を受けるほど，全国的に例のない先駆的な役割を全うし，3月28日，標記組織に衣替えとなります。

市民・行政双方手探りの故の糸のもつれは，昨年4月からの行政担当者の努力の結果，すっきりと解かれましたが，「育む会」発足時の行政担当者のご苦労までもが蘇ったこの1年間でした。

新組織では，事務局は主に市民が担い，舞岡公園に関わる関係者全てが協働できる体制となり，大いに盛り上がりが期待できます。

今まで以上に市民参加が活発になり，人と自然が共に育み合う舞岡公園であり続けますように。

（舞岡公園を育む会　小林　哲子）

募　集

よこはま市民カレッジ

「ヨコハマ　人・まち－まちづくり活動体験講座」開講！

「まちづくり」とは何か？自分にもできることなのか？市民のまちづくり活動の経過と，活動を支援する行政の取組みを振り返るとともに，実際のまちづくり活動（選択制）を体験し，それぞれの地域でのまちづくり活動を調査することで，これからの市民のまちづくりを考えます。

開講日　6/2，9，30，7/14の金曜日と6/10～29の1日（活動体験日）

時　間　午前10時30分～12時（活動体験日は個別）

定　員　50人　　受講料　4，500円

（詳細は，よこはま市民カレッジパンフレット参照）

問合せ　横浜市教育委員会生涯学習課

TEL　045-664-5498　FAX　045-681-1414

「ヨコハマ　人・まち」のホームページは，http://www.city.yokohama.jp/me/tokei/hitomati/

編集：「ヨコハマ　人・まち」編集会議

発行：横浜市都市計画局企画調査課　〒231－0017　横浜市中区港町1－1

TEL　045－671－3512　FAX　045－663－3415

編集後記

原稿執筆や取材にご協力いただきありがとうございました。

「身近な地域に住み続けるために」をテーマに，市民の方々のまちづくり活動と，地域でまちづくりセンター的な機能を果たす活動拠点をご紹介してきました。地域ごとに活動に特色がありましたが，お住まいの地域以外の活動も，参考になればと思います。ご意見，ご感想をお聞かせください。

本文中，特記のないものは編集会議の文責によります。

第12号編集メンバー：赤松　彰利，秋元　康幸，大手　恭子，黒柳　市枝，金成　耕太郎，川崎　あや，嶋田　昌子，

平成12年3月31日発行　横浜市広報印刷物登録　第110366号　類型分類C-JA020　古紙混入率60%